



南海研だより

No. 28

1995年3月

南海研センター特定研究

ミクロネシア調査を終えて

—— 新春座談会 ——

南太平洋海域研究センター（南海研センター）では昨年10月から11月にかけて、ミクロネシア共和国ポーンベイ島を舞台に学術調査を行った。鹿大をはじめ、九大、弘前大から参加した、農学や、海洋学、水産学、建築学、疫学、生物化学を専門とする17名の研究者が、水産学部の「敬天丸(860t)」を舞台に繰り広げた一カ月の調査航海であった。この調査は、1981年のフィージー調査以来、南太平洋諸国で今回を含めて9回にわたって行われてきた南海研センター特定研究の一環であった。

帰国一カ月後、本誌出版委員会では、ミクロネシア気分の抜けきらない中野和敬調査隊長をはじめとする調査隊員の方々にお集まりいただき、ポーンベイ島調査にまつわる思い出話をうかがった。

根建心具（鹿大教養部教授、南海研センター出版委員長） 新年あけましておめでとうございます。それから、ポーンベイ島調査では一カ月にわたる長旅ご苦労さまでした。これまで過

去十年間に、南海研センターでは、南太平洋各地の学術調査をしてまいりました。水産学部の船を利用したこの一連の調査は、現在、センターの研究活動の目玉として定着した感があります。



その研究成果は、毎回の調査報告会で発表され、報告書としても公表されてまいりました。今回の調査結果も、近いうちにそのような形で公表されることでしょう。

しかし、そのような公式の報告書では発表されることのない、素顔の海外調査の実情を、この「南海研だより」を通じて広く知ってもらいたいと考え、この座談会開催の運びとなった次第です。皆さんの忌憚のないお話をお聞かせください。

参加のきっかけ

司会（野呂忠秀，南海研センター出版委員兼調査隊員，鹿大水産学部助教授，海産植物学）

今回の調査隊員の中には、南海研センターの海外調査に過去何回も参加してきた強者（つわもの）もいらっしやいます。その中で、鹿大工学部の土田先生は初めてのご参加でした。そこで、土田先生にマイクロネシア調査に参加した動機などを話していただきたいのですが。

土田充義（鹿大工学部教授，日本建築史）

まず表向きの動機としては、マイクロネシアの民家が日本の民家の建築様式に影響を与えているという論文を読んで、本当にそうなのかどうかを見たいと考えたわけです。で、もう一つの方が私には大事なのですが、水産学部の船に一度乗ってみたいという野心がありました。広い海ってどんな所か見てみたかった。私は、陸で暮らしているわけで海を知らない。そのためには絶好のチャンスであった。また、分野の違う先生方と出会えることもあるし、そういう方々と話すことで、自分の考え方も深まるのでは、そういう気持ちでした。

根建 私も過去に何回か特定研究に参加して南太平洋に出かけておりますが、この調査航海で知り合った友人は一生の友人と思っております。

船酔い、また楽し

司会 谷山港で家族や同僚や学生の見送りを受けて、敬天丸で意気揚々と出港したんですが、

行きの航海は台風に進路を阻まれて大変な航海になったわけですが。

中野和敬（調査隊長，鹿大南海研センター教授，生態学・地理学） 鹿児島湾を出てみるとフィリピン沖に居座った台風の余波で大揺れに見舞われました。食堂の棚のテレビが床に転がり落ちるほどの揺れで、敬天丸は急遽進路を北に変え、台風を避けて東京湾の館山港に避難しました。敬天丸は以前にもポナペに行くときに、やはり大時化（しけ）に会って鹿児島湾内の根占沖に二泊したことがありましたから、南海研センターにとってポナペは鬼門だったのかも知れません。

しかし、もう出国手続きを済ませているわけで、館山に上陸することもできず、天候の回復を待ちながら、一週間程館山沖で房総半島を眺めながら停泊していましたが、農学部の富永先生（調査隊事務局長）は釣りがお好きでしたし、また上手でしたね。館山湾は関東でも有数の釣り場ですが、釣りの腕前から言えば水産学部の先生顔負けの実力でした。

司会 そうこうするうちに、台風を避けて行ける所まで行ってみようというわけで、伊豆の八丈島に向けて東京湾を出港したわけですが、やはり湾を出ると揺れがひどかったですね。

市川敏弘（鹿大理学部教授，生物海洋学）

私はこれまでに東京大学海洋研究所の船やなんか随分と乗っています。敬天丸も二十回ほど乗っているんですが、こんなに揺れた航海は初めてでした。私達は、海洋観測が今回の調査の目的ですから、船酔いで気分が悪かろうと何だろうと、観測点に着くと必死で働かなくっちゃいけないんです。しかし、海洋観測中、船はブカブカ浮いているわけで、その間、船室にいる隊員の方はもっと大変だったと思います。漂流中の船は、風と波に翻弄されて、走っている時とはまた別の揺れ方をしますから。

私がついこの前まで乗っていた東大海洋研の船では、甲板の採水作業や観測作業はすべて船員の仕事で、研究者は外に出る必要もなく、実験室に運ばれてくる試料を分析することだけに

専念できる、いわば研究者にとっては夢のような研究環境でした。しかし、敬天丸では、もちろん船員の方も採水作業は手伝ってくれるのですが—それに付随した作業はすべて研究者が自分でしなければならない。私と大学院生の川村さんだけでは人手が足りないので、多くの隊員の方々にも随分と助けてもらい、本当に助かりました。

司会 でも市川先生の海洋班はすごかったですよ。海が荒れようと夜中だろうと、水深千メートルまで機器を降ろして海洋観測を毎日するんですから。自称、船には弱いはずの市川先生が、その時になるとムックと起き上がって、カッパを着て甲板で作業を始める。

市川先生は、ご自分では船に弱いとしきりにおっしゃるんですが、仕事の合間には、揺れるベッドの中で読書三昧、この一カ月の航海中に本を五十冊読んだそうだし、夜寝る前には、必ず食堂に出てきてビールだけはしっかりと飲んでいました。

根建 しかしあの揺れがあるからこそ、その後の風（なぎ）が格別だったでしょう。

松岡達郎（鹿大水産学部助教授、漁業学）

海が荒れた後に甲板に出てみると、シイラやイカが飛び込んでいたりしました。しかし、ポーンベイ島到着数日前になると、鹿児島湾内を航行しているのと同じような風になりました。

これは帰りの航海でしたが、クジラが船とすれ違って、船内放送で皆甲板に出てそのクジラを眺めたのはオモシロカッタですね。台湾の沖あたりで。その時、私はブリッジにいたんですが、興奮しましたよ。

いざポーンベイ島

司会 でもさすがにポーンベイ島が見えてきたときにはホットしましたね。

富永茂人（調査隊事務局長、鹿大農学部助教授、果樹園芸学） ポーンベイ島は屋久島と同じくらいの島だとよく言われますよね。一番大きな町コロニアは、その比較でいうと安房くらいでしょうか。でもコロニアの人口は五千人く

らいしかないんじゃないですか。目抜き通りも百メートルくらいしかなかったし、信号機のない国というのも珍しいですね。しかし、島の中央の山は700mしかありませんでしたが。

金子新一（鹿大南海研センター事務係長）

島に着いてからは、事務連絡やら表敬訪問やらで、レンタカーを運転することが多かったんですが、私にとっては初めての左ハンドル右側通行で、やはり慣れるまでが大変でした。しかし、島の車は皆おとなしかったので、運転は楽でした。むしろ、日本に帰ってきてから右ハンドル左側通行に戻るのが大変で、何度か反対車線を走りそうになりましたよ。

根建 以前、この南海研の調査でパプアニューギニアへ行った時に感じたのですが、山へ入ると今も弓矢で猟をしている、海の近くでは貝殻を貨幣にしている。しかし私が調査に行く鉱山では、近代科学の粋を集めた技術が使われている、といった文化のギャップが大きくて、その意味でカルチャーショックを受けたことがあります。今回、ミクロネシアではそのようなことをお感じになりませんでしたか。

富永 農業班として時間の許す限りポーンベイ島を隈なく歩き回りましたが、あの島では我々が考えるような「農業」は行われていませんでした。中野先生も農業のない島だと言っておられます。

中野 農業の定義をどうするかで違ってきますが、いわゆる焼き畑農業はやっているみたいです。それから、我々が普通に考える農業が行われていないから、ポーンベイ島の植生は自然のままかという、違います。やはり、彼らは、自分たちの食糧となる植物が家の回りに生えるようにはしているわけですから。最近の言い方では、「アグロフォレストリー」というのがこれに相当するのではないのでしょうか。まだ訳語が出ていなくて、私は「林間農業」と呼んでいます。ポーンベイ島では、ブレッドフルーツのような主食になる樹や植物を、巧みに家の回りに配置して栽培しているようです。そういうわけで、彼らは周囲の生態系を自分の生活に

都合の良いように変化させて暮らしているようです。



富永 コロニアの町の中にはマーケットがあり、ヤムイモやバナナやピーマンやキュウリが売られていました。たぶん給料で生活している人は、それを買って暮らしているんでしょう。しかし、ピーマンやキュウリは他の島から運んできたものでしょう。魚はマーケットに豊富に出ていました。ほとんど氷漬けでした。日本占領時代に柑橘類が導入されているようですし、1980年代に行われた調査では、果樹園が島の中にあるとされていますが、今はそのような果樹園は姿を消していました。ただ、家の回りには食用にする果樹を数本植えて利用しているようです。スーパーマーケットではライムが売られていましたが、これはコスラエ島で収穫されたものだそうです。

松岡 町の中で魚が売られているのをよく目にしましたが、あれは給与生活者が取って売っているんですね。ふつう私が南太平洋諸国で目にするのは、村落の漁民が魚を取って、給与生活者に売って現金を得るという図式なのですが、ポンペイ島ではそれが違っていることにショックを受けました。村落生活者は自分たちで魚を取って自家用に消費している。とすると、市場で売られている魚を買っているのも給与生活者で、キャッシュは給与生活者の中だけでグルグル回っているのではないかと感じます。

土田 専業で漁業をやっている人はいないん

でしょうか。

松岡 私が歩いた限りでは、専業漁師は見ませんでした。しかし、とりあえずキャッシュが必要とき、例えば子供の学校に金を持って行く時に、魚を取ってマーケットで売るようなことをしているようです。

富永 農業調査の時に、船も持っているという人に会いましたが、副業でマングローブガニを取るのに使うのだと話していました。

司会 港の近くに台湾資本のマグロの加工工場がありましたし、ボタンの原料になる高瀬貝は外貨獲得の数割を占めていて、その資源調査に日本の海外青年協力隊員が入っていましたから、この国では、漁業を外貨獲得の手段と考えているようですね。

中野 パリキール（首都）には、台湾の縫製工場があるということでした。

富永 「良く食べていけるな～」というのが実感ですが、軒先に洗濯物がいっぱい干してあるし、道で会う子供達も身ぎれい。人々は、おらかな気性のようだし、警察官も仕事がないみたいでノンビリしていたし、やっぱり暮らしやすいんですね。

松岡 島が小さいこともあるんでしょうが人々の暮らしが均質化している印象を受けますね。小ぎれいな島でした。犯罪に気をつけろという忠告もあまりなかったし。

石垣多英（鹿大農学部学生） 奥地のコショウ農園で現地の方から聞いたんですが、島には現金収入を得る手段が少なく、欲しいと思うと自分の物と他人の物の区別がなくなる人も多いから、靴なんか脱いだまま置いとかないようにとは言われました。

根建 でも総じて言えば、南の楽園ですね。

金子 労働を美化する風もなかったし、小走りで見かけなかったですね。雨が降っても濡れるに任せてノンビリ歩いていました。

富永 どんな田舎へ行っても学校はきちんとしていたし、コロニアでは大学生も多かった。教育がしっかり根付いている風でしたね。六十

歳位の人は日本語を喋るし、若い人も日本に対して親近感を持っているようでしたね。

松岡 結局、この島では、戦争で日本兵が最後まで追い詰められていなくて、ひどいことをしなかったためでしょうか。

富永 私は鹿児島島の田舎で小さい時を過ごしまして、子供の制服や学校に持っていくお金はもちろん必要だが、食べる物はほとんどが自給自足だったような思い出があります。数十年前の日本の田舎のそんな生活が、今のポーンペイ島には残っているみたいでしたね。

司会 現地の方と結婚して二十年来、島に住んでいるという日本の女性に聞いたんですが、ポーンペイ島でもこの五年前くらいから急激に貨幣経済が押し寄せてきて、特に子供に高等教育を受けさせようとするとお金が必要だと言っていました。そのような変化がここ数年至るところで起こり、これからはもっと勢いがついて変わるだろうということでした。

根建 本当でしたらポーンペイ島での滞在は二週間の予定だったはずですが、今回は行きの航海の台風が祟(たた)って、調査は一週間に短縮されたということですが、その点で不便はお感じになりませんでしたか。

林満(鹿大農学部教授、作物学) 遅刻して来てすみません。今まで、どうしても抜けられない会議に出ていたものですから。

ええ、確かに調査日程は半分になりましたが、農業関係の調査も、海や医療関係の仕事も、それなりの中身のある調査をしていたようです。しかし皆さんよく働きました。朝、弁当を持ってレンタカーのトラックに乗って、調査で島の中を駆け回り、夕食に船にもどってからは夜中まで試料の整理で息をつく暇もなかったですな。調査日程が半減したので、どの調査班でも日曜日返上で皆さん働いたようで、現地のカウンターパートもさぞかしビックリしていたんじゃないですか。彼ら、文句も言わないで協力はしてくれましたが、どうみたってアクセク働くことを美德と考えている島とは思えませんでしたから。

次はパラオだ

松岡 でも帰りの船ではそれなりの休養もできましたし、まあ毎日洋上大学はやってましたが、良かったですよ。

司会 ポナベを出港してからは、行きとは違って変わって穏やかな海で、船酔いする人もほとんどいなくて、ノンビリできたわけですが、でも、大学に戻ってきて暫くの間は、同僚や学生達に言われましたよ。廊下を歩くスピードがのろくなつたって。私としては、留守中の雑用をこなすために、精一杯のスピードで動き回っていたつもりなんです。

井上晃男(鹿大南海研センター長、教授、海洋生物学) 今回は台風を避けて航海したこともあって、調査日程が一週間に半減したのは残念でしたが、湯脇船長はじめ敬天丸の方々には、随分と協力していただきました。海洋観測では、海洋班に混じって多くの隊員が揺れる甲板で自主的に作業を手伝っていたし、医療班の調査には農業班の学生がやはりボランティアで協力した。私は、隊員のそのようなチームプレーを見て、大学や専門を越えた学術調査の醍醐味を感じました。今回参加して下さった方々も、共同研究のオモシロさを味わっていただけたのではないのでしょうか。

南海研センターでは、この秋(1995)にはパラオへ、来年の秋(1996)にはパラワン(フィリピン)への調査を計画しております。何れも船を使つての一カ月の調査で、申込は春です。学内掲示などで募集しますので、興味をお持ちの方は、是非ご参加下さい。広い専門分野の方々の参加をお待ちしています。

編集/ 野呂忠秀(鹿大南海研センター出版委員、鹿大水産学部)

A Retrospective on My Visit to Kagoshima University

Harley Ichiro Manner

During June 1 to December 3, 1994 I held the post of Visiting Foreign Researcher at the Kagoshima University Research Center for the South Pacific. Since leaving Japan, I have thought of my friends and colleagues at Kagoshima and the wonderful experiences that I had there. I would like to share some of these thoughts with you.

The purpose of my study at Kagoshima University was to analyze the Japanese literature on traditional subsistence agriculture and related areas (geography, anthropology, ethnology, botany) of Micronesia written between 1890 and 1940. As this was my main responsibility, in contrast to my administrative and teaching duties at the University of Guam, the Visiting Foreign Researcher's position gave me the time I needed to conduct the research. This objective was accomplished because of the tremendous help and cooperation from the staff and faculty of the Research Center. I am very much indebted to Ms. Kusumoto and Mr. Kaneko for their support, and Dr. K. Nakano who served as my mentor and collaborator in Japan. The quiet professionalism of the Research Center's staff, faculty and affiliated faculty greatly contributed to its congenial and productive working atmosphere. In addition to the above research, I wrote two articles, presented three seminars and four lectures, and edited a number of papers by Japanese colleagues, and two book manuscripts by foreign authors. Two other papers are in progress, generated in part, by my interactions and discussions with

Japanese colleagues. In short, I enjoyed going to work at the Research Center every morning.

Culturally and historically Kagoshima is an interesting city and prefecture where one can find both the old and new Japan. I was very pleased to find an excellent collection of Rodin sculptures and French impressionists in its museums and learn of its significance in the Meiji Restoration and the introduction of Western technology and science to Japan. The city and its people are friendly, helpful, and less formal than those in eastern Japan. For most of my stay, the temperature was very tropical.

Before I left for Japan, many friends here on Guam told me how expensive living in Japan would be. Most of their knowledge about the cost of living in Japan were based on their experiences in the tourist hotels and restaurants of Tokyo and Kyoto. I was very surprised, however, to find that the cost of living in Kagoshima was less than Guam's. The price of vegetables, meat and fish in Kagoshima's supermarkets and grocery stores were lower than the prices here on Guam. Perhaps this is true only during the summer when there is a surplus of produce in Japan. Furthermore, and in contrast to Guam, the cost of public transportation and rent (of University provided apartment) was less than I expected. On the other hand, I was dismayed by the high cost of rice and beer.

As I write this, my thoughts are tempered by the devastating Kobe earthquake of

January 18, 1995. I cannot think of Kagoshima without seeing Sakurajima, but because of my experiences at the Research

Center, I would be very happy to return there someday.

(平成6年度 客員研究員：グアム大学教授)

着 任 の 報 告

青山 亨 (あおやま とおる)



1994年11月1日付でセンターの助教授として着任しました。センターで唯一の文系分野である第4課題「歴史生態空間と文化象徴体系の研究」を担当します。

『南海研だより』の誌面をお借りして自己紹介させていただく機会を得ました。

生まれは1957年12月5日、先ほど震災にあった神戸市の生まれですが、長崎市の小中高を卒業しており、九州とは遠からぬ縁があります。京都大学文学部で仏教学（主にインド仏教説話）を専攻し、同大学院修士課程（インドとインドネシアの仏教説話の比較研究）を修了した後、オーストラリアのシドニー大学で博士課程を終えました。オーストラリアでの研究は、14世紀に書かれた古典ジャワ文学作品の読解を通して当時のジャワ社会の世界観、歴史観を再構成しようという試みでした。文学作品を通じて過去の社会の世界観、歴史観を探るといった問題意識

は現在まで続いており、そのためのインドネシアでの現地調査や資料の収集もおこなってきました。このように、これまでインドからインドネシアへと研究対象が東漸してきたわけですが、南太平洋を主な対象とするこのセンターに着任した結果、その対象がさらに一步東に移動した感があります。インドやジャワと異なり書承資料の少ないこの地域の研究をどのように進めていくか、方法論の開拓が現在の私に課せられた課題の一つです。

この鹿児島では、職住ともに落ちついた環境が得られ、大変にうれしく思っています。九州の南端という地理的条件も、アジア・太平洋への最先端であるわけですし、加えて、現在ではコンピュータ・ネットを通じた国際的な情報の交流が可能となってきました。この面から見れば、センターとしても、ここを中心に生産・蓄積されてく情報の電子化と内外への発信体制の確立が課題となるような気がします。センター内外の教官・職員のみなさんの助けをいただいで、センターのこれからの発展のために全力を尽くしていきたいと思えます。

南太平洋海域研究センター研究会発表要旨

第69回

1994年9月26日

第70回

1994年12月5日

インドネシア見て歩き

—淡水漁業を中心に—

鈴木 廣志 (水産学部)

1994年夏、インドネシア共和国を訪れる機会を、日本学術振興会から与えられ、当地の大学や水産研究所の方々と交流することができた。さらに、JICAを通じた日本の技術協力の現場にも接することができた。

ボゴール農科大学のKadarwan Soewardi博士の案内で最初に訪れたのは、中央ジャワに位置するセガラ・アナカン・ラグーンであった。このラグーンは、インド洋側にあるNUSA KAMBANGAN島が天然の堤防となっており、西側一帯は河川由来の土壌の堆積が著しく、急速に陸化が進んでいた。そして現在ではヤマブシキ *Sonneratia alba* やヒルギダマシ *Avicennia marina* がマングローブ林を形成しつつあった。一方、ラグーン内では、汽水産・海産の魚類・甲殻類を対象とした漁業が営まれており、この急速なラグーン内の陸化現象は近い将来これら漁業者にとっては死活問題となりうると考えられる。

ラグーン視察後は、インドネシア各地の水産研究施設、特に、種苗生産施設を見学した。Sukabumiの水産養殖研究施設に代表されるように、公立の淡水養殖研究所では、コイ・ティラピア・オニテナガエビなどの養殖技術の確立とその普及に努力しており、その結果、養殖業者の経済的基盤が安定しつつある。しかしながら、経済収益を最優先にした養殖の普及は、Cipanas州Cirata湖に見られるように超過密な養殖形態をもたらし、そのため、湖水の自家汚染が急激に進んでいた。このままでは内水面養殖は近い将来急激にその生産力を低下する恐れがあると思われる。最後に訪問したのは、バリ島・ベノア湾で、ここではマングローブ植林事業がJICAの協力の下に行われていた。既に2年目を迎え、期待した成果が得られつつあり、植林適正種の選択・生存試験でも、90%以上の苗木が生育するという好結果が得られていた。

東南アジア熱帯におけるアリ研究の動向

山根 正気 (理学部)

これまでに世界から8800種のアリが記録されているが、今後研究が進めば12000種をらくに超すとされている。アリは、とくに熱帯・亜熱帯で種多様性が高く、熱帯雨林では種数のみならず生物量の点でも他の動物群を圧倒している。また、アリと植物、アリとアブラムシなど同翅類昆虫との共生は、学問的な興味ばかりでなく、熱帯林のあらゆる生物的過程を理解するうえできわめて重要であることが認識されつつある。

そうした中で、分類学的研究の遅れは、熱帯におけるアリ研究にとって大きな足かせとなっている。とくに、東南アジア熱帯のアリの分類はカオス的な状態にあるといわれ、19世紀末から20世紀初頭に大量の新種や新変種が記載されたあと、ごく一部のグループをのぞき再検討がなされていない。そのため、生態学的に重要な普通種の学名を知ることすら困難な状況にある。

演者はこの10年来、スマトラ、ジャワ、ボルネオなどでアリ類の採集につとめ、標本の蓄積を行ってきた。また、1992年からはボルネオ島のサラワクで、林冠生物学のおおがかりなプロジェクトが発足し、林床部だけでなく最上層をふくむ林全体のアリ類の採集が可能となった。昨年これらの標本をジュネーヴとロンドンの自然史博物館に所蔵されている数百のタイプ標本と比較する機会があり、4割ちかい種の同定ができた。現在、熱帯林できわめて大きな生物量をしめるオオアリ属の分類学的再検討にとりかかっている。

最近、マレー半島、ボルネオ島のサバ、カリマンタンなどでアリの生態調査が数ヶ国の研究者によって精力的になされており、分類学者と生態学者の協力、国家間の情報のコミュニケーションがきわめて重要になってきた。また、熱帯圏における昆虫分類学者の養成が急務であり、それに対する日本のきめ細かな援助が必要である。

生活とまつり

小林 孝子 (教育学部)

昭和38年、南科研の援助を受けて、アメリカ軍政下の沖縄の染織および生活調査を行って以来、「日本在来織布の研究」「環太平洋地域の被服生活」「布の系譜について」等、南に視点を向けて、衣料を主にした生活調査を続けてきたが、今かえりみると、それらの結果の中には、鹿児島から南へつながる一連の線を認めることができる。

それは、衣・食・住という具体的な現実生活だけではなく、人々の心が関わる精神生活の中にも見出すことができる。例えば「まつり」にしても、日本では榊さかきが神々のまつりに用いられるが、中国南部の水かけ祭りも、(現在は相手かまわず水を浴びせかける観光行事になっているが)水牛が自由に動き廻っているような集落の奥の方を歩いてみると、照葉樹しょうえつじゆの小枝に水をつけて振るという、日本の祓はらいのような動作をみることができる。南海研の初代センター長中尾佐助教授の「照葉樹林文化」論による日本文化と雲南のつながりが想起される情景である。

ところで、小学校の教育課程に「生活科」が新設され、平成4年度から実施されている。それに伴い教員養成の大学でも生活科の講義が開

講され、私は「人間と生活」という題目を担当することになって、3年が経過した。小学校2年の2学期に、生活科では「まつりーこどもみこしを作ろうー」という単元がある。いま日本各地で、ふるさとの祭が見直されているが、祭を人集めの派手なイベントとしてだけでなく、民族学や民俗芸能という立場から、日本の著明な神社や、県内各地の年中行事、文化財など私自身で採録したものを中心に、毎時間ビデオで紹介してきた。従来、神社関係の行事は積極的に紹介されることは少なかったが、これらは日本人の生活の基層文化を現代生活の中から確認するための文化財として重要なものと思われる。伊勢神宮の遷宮行事や神宝は、日本民族の見事な文化遺産というだけでなく、世界の考古学に資する点も見落とすことはできない。例えば、玉纏たままと御太刀や宝鏡などは、高松塚古墳や藤ノ木古墳の被葬者を考える際の貴重な資料であり、また20年ごとの遷宮の際には、神殿と共に神宝類も新調されるが、古来、明治末までは、古神宝は土中に埋められ、または焼却されていた。考古学の分野で、青銅器が多量に発掘されることがあるが、青銅器の用途や埋納の意味などは神宮神宝の扱いから学ぶことが多いといわれている。また、現在も行われている御田植祭から抜穂祭等、稲作にかかわる一連の祭りは、古代農法の型を伝えていることが少ない。以上のような内容について、スライド約80枚を用いてご紹介した。



第61回遷宮前日、外宮の川原大祓を終えて退出の祭主、大宮司(平5.10)



鹿児島県知覧町の小正月行事カセダウチ(平5.1)

南太平洋海域研究センター専任・兼務教官の 海外出張及び研修記録一覧表

(1994年9月～1994年12月)

所 属	氏 名	期 間	国 名	用 務
農 学 部	林 満	H6. 9. 9～H6. 9.29	中華人民共和国	科学研究費補助金（国際学術）による大学間協力研究学術交流協定の協議・甘蔗科学研究の技術交流
理 学 部	山根 正気	H6. 9.20～H6.10.28	ス イ ス ・ 連 合 王 国	ジュネーブ自然史博物館及びイギリス自然史博物館にてサラワクのアリ類の同定，分類
教 養 部	鈴木 英治	H6. 9.25～H6.10. 8	インドネシア 共 和 国	論博研究指導のため（日本学術振興会）
水産学部	川村 軍蔵	H6.10. 1～H6.10. 8	オーストラリア	国際学会出席
理 学 部	大塚 裕之	H6.10.17～H6.10.27	中華人民共和国	中国科学院の研究所の記念式典とシンポジウム出席
水産学部	税所 俊郎	H6.10.21～H6.10.26	中華人民共和国	東支那海の海洋生物調査に関する打合せ及び青島海洋大学70周年式典に参列
歯 学 部	北野 元生	H6.10.24～H6.11. 6	西 サ モ ア	「ポリネシアにおける成人T細胞白血病の疫学」による検体収集と調査
歯 学 部	國芳 秀晴	H6.10.24～H6.11. 6	西 サ モ ア	「ポリネシアにおける成人T細胞白血病の疫学」による検体収集と調査
医療技術 短 大	内尾 康人	H6.10.24～H6.11. 6	西 サ モ ア	「ポリネシアにおける成人T細胞白血病の疫学」による検体収集と調査
南 海 研	寺師 慎一	H6.10.24～H6.11. 6	西 サ モ ア	「ポリネシアにおける成人T細胞白血病の疫学」による検体収集と調査
理 学 部	市川 敏弘	H6.10.24～H6.11.25	ミクロネシア連邦	平成6年度特定研究「ミクロネシアの人間と環境」による海外学術調査
工 学 部	土田 充義	H6.10.24～H6.11.25	ミクロネシア連邦	平成6年度特定研究「ミクロネシアの人間と環境」による海外学術調査
農 学 部	遠城 道雄	H6.10.24～H6.11.25	ミクロネシア連邦	平成6年度特定研究「ミクロネシアの人間と環境」による海外学術調査
農 学 部	富永 茂人	H6.10.24～H6.11.25	ミクロネシア連邦	平成6年度特定研究「ミクロネシアの人間と環境」による海外学術調査
農 学 部	林 満	H6.10.24～H6.11.25	ミクロネシア連邦	平成6年度特定研究「ミクロネシアの人間と環境」による海外学術調査
水産学部	野呂 忠秀	H6.10.24～H6.11.25	ミクロネシア連邦	平成6年度特定研究「ミクロネシアの人間と環境」による海外学術調査

所 属	氏 名	期 間	国 名	用 務
水産学部	松岡 達郎	H6.10.24～H6.11.25	ミクロネシア連邦	平成6年度特定研究「ミクロネシアの人間と環境」による海外学術調査
水産学部	湯脇 泰隆	H6.10.24～H6.11.25	ミクロネシア連邦	平成6年度特定研究「ミクロネシアの人間と環境」による海外学術調査
南海研	井上 晃男	H6.10.24～H6.11.25	ミクロネシア連邦	平成6年度特定研究「ミクロネシアの人間と環境」による海外学術調査
南海研	中野 和敬	H6.10.24～H6.11.25	ミクロネシア連邦	平成6年度特定研究「ミクロネシアの人間と環境」による海外学術調査
水産学部	市川 洋	H6.10.30～H6.11.5	中 華 民 国	世界海洋循環実験海洋観測計画委員会第13回会合に出席のため
農 学 部	片山 忠夫	H6.11.9～H6.11.27	バングラデシュ	バングラデシュ農業大学院計画フェーズII短期専門家の派遣員として参加
教 養 部	新田 栄治	H6.11.11～H6.12.1	ラ オ ス	ラオス国内所在考古学遺跡の調査
水産学部	川村 軍蔵	H6.11.14～H6.11.23	インドネシア 共 和 国	日本学術振興会海洋科学拠点方式による学術交流派遣研究のため
工 学 部	土田 充義	H6.12.8～H6.12.11	大 韓 民 国	韓国済州島民家の調査
教 養 部	新田 栄治	H6.12.9～H6.12.15	タ イ 王 国	日・タイ拠点大学セミナー「タイとその近隣国(II)；ラオス、ベトナム、カンボジア」
工 学 部	前田 明夫	H6.12.11～H6.12.14	マレーシア・ シンガポール	第5回日本学術振興会マレーシア学長会議セミナー及び日本学術振興会国立シンガポール大学合同会議に参加
農 学 部	石畑 清武	H6.12.19～H6.12.25	マ レ ー シ ア	マレーシアにおける熱帯果樹の生態調査
南海研	青山 亨	H6.12.21～H7.1.12	インドネシア 共 和 国	インドネシア共和国における文献資料調査と資料収集(国際学術研究)
歯 学 部	仙波伊知郎	H6.12.25～H7.1.5	ネ パ ー ル	ネパールにおける歯科疾患調査及び研究打合せ

南海研センターの出版物

Occasional Papers No.25

Decompression Sickness in Divers

(Ed. KITANO, M., 1994.)

NASHIMOTO, I. : Diving medicine. 1-3.

MOHRI, M. : Recent survey on diving fishers
in Japan. 5-11.

MANO, Y. : Safety and health at nonsatu-
rated diving : The actual situation of
Japanese sport divers. 13-19.

MANO, Y. : Statistical investigation of work-
ing pressure and decompression sickness
at compressed-air workers. 21-29.

ARIKAWA, K., NOGUCHI, H., MASUDA, T.,
KUBO, K., HIRAKAWA, W., and
NOMAGUCHI, S. : Study of twelve cases
of decompression illness during the past
two years. 31-36.

KAWASHIMA, M., TAMURA, H., NORO, Y.,
TAKAO, K., KITANO, M., LEHNER, C.E.,
TAYA, Y., MANO, Y., and TSUNOSUE, T.
: Pathogenesis and prevention of
dysbaric osteonecrosis. 37-46.

KITANO, M. : Pathological aspect of decom-
pression sickness. 47-59.

センターの動向

平成7年度外国人客員研究員として米国タルサ大学教授（人類学科長）Lindstrom Lamont Carl 氏を招へいすることになりました。招へい期間は、平成7年9月1日～平成8年3月25日です。

南海研だより No.28 平成7年3月25日発行

発行：鹿児島大学南太平洋海域研究センター

〒890 鹿児島市郡元一丁目21-24 電話 0992(85)7394

ファクシミリ 0992(56)9358